

第133話<共同体崩壊>の要約と参考資料

第133話<共同体崩壊>の要約

1955年に始まった高度経済成長は、若年労働者の都市流出、農業機械化の進展、共同労働の消滅といった変化をもたらしました。土呂久には1890年の結成以来、助け合いの精神で集落を自主運営した和合会がありました。誇りであった和合会が存立基盤を失ったのです。

第133話<共同体崩壊>の参考資料

133-1 佐藤洋さんが語る高度成長期の土呂久

佐藤洋さんの話（1982年8月27日聴取）

昭和40年ごろ、かまどのご飯炊きがなくなった。プロパンに替わった。同じころ、屋根普請がなくなった。

屋根普請。1軒分全部屋根をふくと、50年～60年もつといわれるカヤが足りん。30坪の家のカヤをふくのに、1軒まるまるふけば10町歩のカヤがいる。「丸普請」というて、どこのカヤ場、ここのカヤ場と全部のカヤを提供しなければならない。そこで、悪いところだけ替えていくやり方をした。

畠中、南、惣見でそれぞれにひとつずつ、10何軒で結（いいとり）を構成して（中にはカヤ場を持たない人もいる）、屋根普請に出てもらったお礼は手間で返す。農作業でお返しをする。いま、土呂久にカヤ屋根はなくなった。カヤで屋根をつくったら、手間賃を払うだけで、普通の家が1軒建つといわれる。丸普請の場合、10何人でかかる、カヤ切りからいれて一月はかかる。昔はみんなが屋根師だったが、今は屋根師もいなくなった。瓦屋根に替わってから、カヤ場に植林してしまった。以前は、春先に野焼きして、ほっとくと、秋にはカヤが5メートルにもなりよった。

屋根の広さが「うちは20坪分だった」とか「40坪だった」、あるいは田植えのとき「うちの田は2反だから、あそこの田4反のうち2反しか手伝わん」といったのでは、共同作業はできない。成り立たない。普請は話し合いの場、共同することで、輪が、心の通じ合いがあった。

畠中の最後の屋根普請は、今から15、16年前、白石（来さん）の母屋だった。

農業一つ取り上げても、自分たちの小さいときは、農耕は牛。労力が大変、疲れるので、共同でやっていた。ところが耕運機がはいってきて、隣が買えばうちも買う。こうして、共同体で農耕をやることがなくなった。一度離れたら、元には戻らん。

耕運機を共同で購入して、共同で使った方がいいと思った。同じ部落内で、今日はうち、明日は隣、次は先隣りというふうに。ところが、日和の都合がある。天気が違えば、3日

遅れれば稻の穂のできに影響し、作柄が悪くなる。個人的な争いになる。こんなふうに、いちばんの原因は金の問題。共同購入の話に入る前に、金の融通がつく人が、先に個人で購入した。1枚の田はそんなに広くないのに、田植え機を買うのは採算に合わないが、しかし機械に頼らんと、今は労賃の方が高くなりすぎて、また人手が集まらん。労賃は今、山林の下刈りだと、5, 6千円（弁当持参）、田植えは3500円（飯付き）。

土呂久ツアーパートナーと佐藤洋さんの質疑応答（1982年8月27日聴取）

——昔、屋根普請を共同でしていたのに、今、1か月近く普請に出ると、自分が食えなくなるのは、なぜか？

洋 換金作物とか、日役とりに出て、金を稼がないかん。カヤ普請のころは、耕運機だと機械を買う金もいらなかつた。

——農業全体の構造の変化か？

洋 それが変わってしもた。時代が、そう流れてきたから。

——その農業の状態を、どうやっていきたいのか？

洋 今の農業はせからしい。昔、牛でやつとったとき、金は要らんけ、のんびりしとつた。今は金が要るばっかり。くたびれてしまう。金には金で、追い回されて。

——牛の時代に戻りたいとは思わないのか？

洋 クワとかスキとかになれば、農機具を新しくせんといかん。牛も、いまの牛は体型が違うし、慣らして一から始めんと。堆肥を運ぶのも、背負うとなれば、苦痛。

——昔は人の労力が余っていた？

洋 なにしろ人手が足りない。今のやり方だと、薬を使って手間を省けているが、薬剤を使わず、労力を雇うことになれば、お金がまたかかる。機械、薬を使ったがいいような感じ。

——家族の構成が変わったのか？

洋 昔はおじさん、おばさん達が24, 25歳から30歳近くまでおったが、その人たちが高等学校卒業すれば、よそに行っておらんようになって、労力がなくなつた。機械に頼らんとしようがなくなる。よそに仕事（働き場）が多くなつたため。昔はそれがなかつたから、加勢しながら、食べながらやつた。

（＊佐藤洋さんの生年月日：1942（昭和17）年8月4日）

133-2 高度経済成長期の農村

三和良一・三輪元著「概説日本経済史 近現代」（第4版）P206より

高度成長の過程で農業と農村は急速な変貌をとげた。この変化に歯止めをかけようとした1961（昭和36）年の農業基本法も、大きな成果をあげなかつた。1950年に1610万人を数えた農業就業人口は、70年には933万人に減少した。同じ期間に専業農家戸数は、

309万個から83万戸へ激減した。農村は、高度成長のために労働力を供給する役割を果たしたのである。

農業就業人口は減少したが、農業生産は増加し続けた。それを可能にしたのは、米価を中心とした農産物価格支持政策による農業所得の安定化と、①改良品種や改良技術の出現、②新肥料の開発や施肥技術の進歩、③土地改良などの公共事業の進展、④高性能の農業の開発、⑤農業機械の普及、などからなる農業技術の進歩であった。

技術の進歩により農業がかつてのように大量の労働力を季節的に投入しなくてすむようになつたことは、農村からの労働力流出の可能性を高めた。農業従事者は、大規模で労働節約的な経営によって高収入を確保することができる少数の農業専従者と、農地を保持しつつも主として事業収入に依存する多数の兼業農家とに分化していった。

133-3 高度経済成長と出稼ぎ

林信彰「農業政策の破綻と出稼ぎ」より

●今日的な意味での出稼ぎとは、昭和35年以降の高度経済成長の過程のなかで生まれた特殊なものだということができる。(略)昭和35年に17万人であったものが、38年には30万人に激増し、以後は25万ないし30万人と横這いをつづけている……。この出稼ぎ者の激増は、昭和38年の東京オリンピックを契機として、地下鉄、高速道路、下水工事などの都市建設などに、多量の建設労働者を必要としたという非熟練労働力需要の激増が引き金となったものである。

●戦前の出稼ぎは、農家の潜在労働力が中心であった。戦後も、昭和35年以前は、二、三男など傍系家族が4割を占めていたが、今日の出稼ぎは、そのような潜在失業人口の循環出稼ぎから、明らかに質的な変化をとげてきている。

●これを変えられたのが、昭和30年以降の「流通革命」「消費革命」である。石油の輸入拡大を中心に産業構造が転換していくなかで、木炭がプロパンガスに変わり、タワラ、カマスが紙やポリ袋に、ワラぐつはゴムぐつに変った。農村副業として冬期間の貴重な所得源であった炭焼きワラ工品の市場が失われたことは、零細農家の所得に大きな打撃を与えた。加えて30年以降、米価はほとんど据え置き状態であったために、50アール以下の零細農家がまず出稼ぎに出はじめた。

●昭和35年以降貿易自由化が進められ、いわゆる開放経済体制に入るや、日本の農村は決定的な変化をみせてきた。昭和35年代に入ってから徐々に始った農産物市場の不安定性は、自由化政策のもとで、海外農産物との競合を強いられたことによって、さらに激化し、農産物価格は、相対的絶対的な低下傾向を示した。その一方で、農業生産の省力化のために機械などの購入が強制され家計費もまた増大してきた。

133-4 プロパンガス普及の歴史（インターネットより）

諸説ありますが、1953年頃から家庭でもプロパンガスが使用されるようになりました。それまで家庭で使われていた燃料と言うと、「薪」「炭」「練炭」といったものでした。薪は木を伐採し、これを乾燥させ、火種から火を移し、やっと使えるというもので、炭や練炭を作る際にも手間がかかるものです。さらにその火力は不安定で、毎日使うものとしては不便な道具と言えるでしょう。

そこへハイカロリーなエネルギー資源としてプロパンガス（LPガス）が導入されたことは一つの革新だったことは想像に難くありません。簡単に扱えて強い火力を得ることができるのでこの道具は、瞬く間に全国へと普及していきました。

生活が豊かになった歴史の転換期ではありますが、それだけに不安定な面もありました。国内の製油所でプロパンガスを生成していたのですが、それはあくまで石油製品の副産物であってLPガスをメインに生産していたわけではありません。

そのため製油所が稼動していないときは生産されませんし、そもそも石油が無ければならないのです。LPガスの歴史としてはまだまだ始まったばかりだと言えます。

133-5 結と普請

小学館 日本大百科全書(ニッポニカ)より

結（ゆい）

語源的には結う、結ぶ、結合、共同などを意味し、地域社会内の家相互間で行われる対等的労力交換、相互扶助をいう。地方によってはイイ、ユイッコ、エエなどとよばれ、また中国・四国地方のように手間換(てまがえ)、手間借(てまがり)と称する所もある。結は催合(もやい)とともにわが国の伝統的な共同労働制度の一つであるが、催合の慣行がかつて漁村で盛んで現在は衰退しつつあるのに対し、結は農山村で盛んで、現在も田植、稻刈りなどさまざまな機会に行われている。結における労力交換では、多くの場合、働き手として出動する個人の労働力の強弱はあまり問題とはされないが、一人前の人間が1日提供してくれた労力に対しては、かならず1日の労働で返済することが基本で、金銭や物で相殺することを許さない点に特徴がある。結は農耕作業で行われることが多く、起源もそこにあると考えられるが、実際の機会はそれにとどまらず、屋根の葺替(ふきか)え作業における茅(かや)の切出しや縄ないなどでもよく行われた。

そのほか奇抜なものとして、秋田県では共同で按摩(あんま)の練習をすることを結按摩とよんでいたし、結で髪を結い合うなどの例もあり、結の意味が共同という範囲にまで拡大して解釈されることが少なくなかった。

〔野口武徳〕

広辞苑（第4版）より

普請（ふしん）：①禪寺で、大衆を集めること。また、あまねく大衆に請うて堂塔の建築などの労役に従事してもらうこと。②転じて一般に、建築・土木の工事。

Wikipediaより

普請とは、普く請うとも読み広く平等に奉仕を願う事であり、社会基盤を地域住民で作り維持していく事を指し、現在では公共の社会基盤を受益する共同の人々または公共事業により建設および修繕、維持する事。